ポーランドと社会主義、二十世紀がこれほど変化のある時代であることが克明に書かれている。そして結局モニカを、その親戚が引き取ることで、筆者は一年に一回会いに行く織姫・彦星さまとなるのであるが…。

この作品は、実は未だに進行中の「日記」だと思う。筆者自身が産むことのなかった、しかし事実上の娘であってもよいと認めたモニカ、幼年時代の記録のない子どもへと手渡すべき「アルバム」であるのだろう。（村田 譲）

ゆかりの旧都ペテルブルクで

初めてのB・ピウスツキ展　井上 紘一

サンクトペテルブルクのロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）は、初のB・ピウスツキ企画展「ブロニスワフ・ピウスツキの諸世界～人類学民族学博物館蔵資料から」を開催しました（2019.12.6~2020.3.16; 7.14~27）。

同館はピョートル大帝の命で 1714 年に創設された「クンストカメラ」（珍品陳列室）に淵源し、2014 年には 300 年祭を挙行しました。クンストカメラは 1836 年の科学アカデミー定款により専門別7博物館とピョートル1世室に分割され、民族学博物館は 1844 年に誕生しました。本館に同居する人類学博物館と民族学博物館は 1878 年に合併して人類学民族学博物館（以下 MAE）を名乗り、帝都創建 200 周年の 1903 年以来ピョートル大帝の名を冠しています。ロシア革命後はソ連科学アカデミー民族学研究所として黄金期を迎えたものの、1934 年の科学アカデミー本部モスクワ移転以降、同研究所レニングラード支部の地位に甘んじていました。ソ連崩壊後は華麗な歴史を象徴する現称を名実ともに継承しています。MAE としての歴史は1世紀半足らずですが、今や五大陸の人類文化遺産 120 万件を収蔵する大博物館、1727 年ワシリエフスキー島のネヴァ河畔に建立された本館=上写真=を今も踏襲しています。

MAE のピウスツキ・コレクション

ブロニスワフ・ピウスツキ（1866~1918）は学業期の 2 年弱（1885.8~1887.5）をペテルブルクで過ごしたので、きっと MAE を訪ねる機会はあったでしょう。それはともかく、極東流刑中（1887.8~1905.12）には MAE の依嘱でアイヌとウイルタの民族資料収集に従事（1902.7~1905.6）、大部分の採集標本を MAE へ納めました。1903 年夏にはロシア地理協会が派遣したヴァツワフ・シェロシェフスキの北海道アイヌ調査に参加、その際の収集品も MAE に納入されています。ヴェロニカ・ベリャエヴァ=サチュク（現）MAE 上席研究員によると、ピウスツキ（とシェロシェフスキ）が 1902～05 年に収集した MAE 所蔵標本の総数は 1,396 点、内訳は（若干のウイルタ標本も含む）アイヌ標本 1,169 点、ニヴフ標本 79 点、その他（シェロシェフスキが満州や中国本土で採集したモンゴル人・中国人資料）148 点です［Beliaeva-Sachuk, 158-160 ﾍﾟｰｼﾞ］。つまりピウスツキたちはサハリンと北海道で採集した原住民標本 1,248 点を MAE へ納入、約 700 点がエンチウ（樺太アイヌ）、300 点は北海道アイヌにかかわり、エンチウ資料は世界で最大・最良のコレクションです。

MAE のピウスツキ・コレクションは一部が常設展示されていますが［図録3, 59 ﾍﾟｰｼﾞ］=右写真=、まとまった形での出展デビューは 1991 年、サハリン州郷土博物館がピウスツキ生誕 125 周年に開催した第2回ピウスツキ国際会議「B・O・ピルスツキーはサハリン諸民族の研究者」の特別展でした。MAE から 70 点、ウラヂヴォストクの沿海地方総合博物館から 4点を借用して、館蔵アイヌ標本も併せた 96 点のピウスツキ収集品を開陳しました［図録1］。次は 2013～14 年、小樽市総合博物館と九州国立博物館が MAE と組んで、「ロシアが見たアイヌ文化～ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより」と題する「アイヌ工芸品展」を小樽と福岡で開催しました。展示された MAE 蔵アイヌ資料 141 点（エンチウ 85、北海道アイヌ 42、千島アイヌ 14）のうち 104 点はピウスツキらの収集品（エンチウ 74、北海道アイヌ 30）でした［図録2］。私たちはピウスツキが自ら採集したアイヌ標本の実物を、日本で初めて瞥見する機会に恵まれました。

MAE におけるピウスツキ企画展

今回のピウスツキ企画展は通算3回目ですが、ペテルブルクの MAE での開催は、1世紀超の収蔵期間で初めての快挙です。企画展の開幕には、クンストカメラの 305 回誕生日に当たる 12 月6日がわざわざ選

ばれた由、クンストカメラ=MAE=ピウスツキの関係を想起する日になりました。この際はロシア帝国とその社会がピウスツキ畢生の仇敵だった事実を、しかと肝に銘ずべきでしょう。

残念ながら私は同展参観の機会を逸しましたが、以下に関連情報をまとめて報告します。企画と展示構築を担当したアンドレイ・ソコロフ MAE 研究員とヴェロニカさん=写真=は、MAE コレクション 1,248 点から精選した 53 点（エンチウ 38、北海道アイヌ 14、ニヴフ1）を、塔室2階回廊に設置された大小8個の「ガラス窓」内に陳列、随所でピウスツキ撮影の関連写真など 19 点も開陳しています。それぞれ〈手工芸〉〈日用品〉〈狩猟漁撈〉〈女の衣装〉〈男の衣装〉〈子供の世界〉〈信仰〉〈熊祭り〉と銘打たれた「窓」には5～10 点の関連標本が象徴的に配置され、例えば、〈子供の世界〉（男児用毛外套、玩具など5点）=写真①=、〈信仰〉（シャマンの手太鼓、イナウ、奉酒箆など 10 点）=写真②=、〈熊祭り〉（熊檻模型など6点）=写真③=は専らアイヌ標本で構成され、〈日用品〉の「窓」には「ニヴフの扇」=写真④壁面中央=も含まれています。展示の様子はヴェロニカさんがロシア語で解説する案内ビデオからも覗えます。

企画展開会式では MAE の新刊書『ブロニスワフ・ピウスツキの目を通してみたアイヌの世界～クンストカメラ・コレクション』[図録3]も披露されました。同書は 100 点の館蔵標本（エンチウ 65、北海道アイヌ 34、ニヴフ1）とピウスツキ撮影写真 37 点（エンチウ 35、ニヴフ2）を収録し、解題と本文の執筆者はやはりソコロフ研究員とヴェロニカさんです。実に不思議なことに、そこには「企画展」への言及が全くありません。ヴェロニカさんによると、アンドレイ・ゴロヴニョフ MAE 館長が企画展を着想したのは何と 2019 年9月で、全作業が僅か2カ月半で完遂されたそうです。図録用原稿はそれ以前に擱筆済みだったのでしょう。

今一つの注目点はポーランド政府系財団「ポーランド=ロシア対話・理解センター」が前付けに併記されていることです（巷間では同センターが刊行経費を支弁、発行部数 500 を MAE と折半と伝えられます）。

開会式に先立つ 12 月2日と3日、ワルシャワとクラクフでは図録の出版披露イベントが挙行され、ゴロヴニョフ館長とヴェロニカさんが列席しました。

ヴェロニカさんの私信は「ピウスツキの仕事がアイヌだけ、また学術のみに限定されず、サハリン住民の啓蒙活動や生活改善にもかかわったことを紹介したい」と記しています。今回の企画展と図録は確かにその一端の開示に成功しているとはいえ、いまだ道半ばと言わざるをえません。MAE 所蔵標本 1,396 点を駆使して「ピウスツキの諸世界」が全面開陳される日を鶴首して待ちたいと思います。

最新情報によると、MAE はコロナ禍の猖獗で閉館を強いられ（3.17~7.13）、企画展も中断されていましたが、7 月 14～27 日まで再開されました。

謝辞 本稿執筆に当たりヴェロニカ・ベリャエヴァ=サチュクさんから関連情報と写真を頂戴しました。この場をお借りして謝意を表します。

（いのうえ・こういち）

写真①〈子供の世界〉

②〈信仰〉

③〈熊祭り〉

④〈日用品〉

【参考文献】 Beliaeva-Sachuk, Veronika A., “In the Shade of the Two Eagles. Museum Collections of Polish Researchers and Travelers in Peter the Great Museum of Anthropology and Ethnography (Kunstkamera) of the RAS”, Etnografia, № 4: 151-171, St. Petersburg: MAE RAS, 2019

（図録1）樺太アイヌの民具，ヴラヂスラフ M.ラティシェフ，井上紘一共編，北海道出版企画センター，2002.2

（図録2）ロシアが見たアイヌ文化～ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより，アイヌ文化振興・研究推進機構編集，2013.10

（図録3）The World of the Ainu through the Eyes of Bronisław Piłsudski. Kunstkamera Collections（露波英3語併記）Authors: A. M. Sokolov, V. A. Belyaeva-Sachuk, St. Petersburg: MAE RAS, 2019